
やおろずの神々のおわす国

ふうこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

やおろずの神々のおわす国

【Nコード】

N4135Z

【作者名】

ふつこ

【あらすじ】

その世界にはすべてのものに神が宿る世界。

水も食料も服も動物も人間に至るまで、すべて神々の恩恵で成り立っている。

その神々と常にともにある存在、

『現人神』

そうよばれる存在は神々を僕にすることが出来るという。

そんな現人神である少女に、ある日、国の姫からの依頼が入る。

それは、姫の守護神探し。

現人神と姫をめぐる物語が幕を開ける。

序幕

深く先も見えないほどに濃い霧の貼った大きな森。

空を見上げて、霧と木々に遮られ空はおるか太陽すらその顔を覗かせてはくれない。

道無き道には、獣の姿もなく不気味なほど森は静まり返っている。

今が朝なのか、または夜なのかわからない。

ただわかるのは、目の前に広がるのは、白い霧。いけどもいけども、その状況が変わるわけではなく、程遠い出口をさまよって歩くだけなのだろう。

そんな森を息を切らして走る人影がある。

足音の間隔が短く小刻みにリズムを付けている。どうやらまだ幼い子供が、その人影と足音の主のようだ。

人影はある程度走ると後ろを振り返る。そしてまた走り出す。

それをしばらく繰り返す。

どれほど進んだのだろうか、子供の人影は大きな木にもたれかかり、大きな安堵の息をもらした。逃げ切った……子供はそう信じた……しかし。

「みいつけたあ!!!」

ビクン身体を震わせる、得体の知れない森に響く不気味な声と共に、子供がもたれていた大木が歪む。

グイッと大木から伸びる腕。その腕が幼い腕を強引に掴み、まだ小さな体を宙へと放り投げる。飛ばされた子供に抗う術はなく、そのまま地面へと叩きつけられてしまう、声にならないうめき声を上げあまりの痛みにその場から動けない。

その様子を見ていた、大木から伸びた腕は、またグイッと形を変え、腕はやがて、人の形へと姿を変える。

子供は痛みで朦朧とする意識の中、その姿を見た。

「姫、鬼ごっこは終わりです。」

あなたさえいれば、全てが手にはいるのですよ」

「あうっ！」と悲痛な悲鳴を上げ、自分の体が動かないことを確認した。

「姫様、そろそろ遊びの時間はお終いにしましょう？」

姫様と呼ばれた子供。

朦朧とする意識の中で、声の主を確認する。

それはどこかで聞いたことのある声だった。

「やれ」と男が命令を下す。

命令を受け、動き出す陰、それは男よりも遙かに大きく異形の形をしていた。その異形の腕が無慈悲に姫様へと向けられる。

姫は目をつむる。

死を受けいるためではない、死など覚悟などするわけがない。

歯を食いしばる。

何も出来ず、この人達に利用される。それが悔しくて仕方がなかった。

異形の腕の鋭く上がった爪が横たわったままの姫を襲う。

迫り来る狂気を前に、声を絞り出して叫ぶ。

「私は……あなたたちなんかには負けない!!」

それは力強い声。

しかし、その声に怯えることなく異形の腕が空を裂く。再び固く目を閉じる。

ドカア！！

響く鈍い音。けれど、痛くない。思えば、何も体に触れていない。何が起きたのか気になり、固く閉じた目をゆっくり開いていく。目に光が入り、あたりの風景が視界に入る。

心なしか、霧は晴れていた。目の前には何もいない。

あたりを見回す、前方少し離れた場所に男と異形が2体。

姫が確認した影は3体。もう一体はどこに行ったのか？

ふと男を見ると、姫の上を見ていた。姫も上を見してみる。そこには。

「……………これ……………？」

異形が短い刀のような刃物に、姫が先ほどもたれかけていた大木に礫にされていたのだ。

「だ、誰だ！？」

慌てる異形を操る男。

すぐにその所業の犯人はわかることになる。

「良く悪態が付けましたね姫様……………」

子供らしくてナイスでしたよ。」姫や男の視線が声の方へと向く。

そこには一人の少女が歩きながら、こちらへと進んでいた。

その出で立ち、神社などにいる巫女のように。

ただ、胸元がやけに開いていたり、ミニスカートだったり、太ももまであるソックスを履いていたり、肘よりも長い手袋をしていたりと巫女とは少しかけ離れている。

更に、少女の神に姫は魅入られる。

ウェーブがかかった長い髪、しかしその髪の色が雪のような銀色の髪。

日が届きにくい森の中でさえ輝いているようだった。

「何だ貴様は!?!」

少女は立ち止まり、腕を組む。

「さあ…、あなたの邪魔をしにきただけよ」

少女は顔に笑みを浮かべ答える。

「あの……」

姫が動こうとすると、「ボフ……」という音と共に礫にされていた異形の者が黒い霧となり、宙へと霧散していった。異形を礫にしていた短刀が少女の手の中にふわりと戻る。

手の中に納められた短刀の刃の部分には、文字のような記号のようなものが一面に描かれてある。その短刀を肩にポンと軽く乗せ、男を軽視した視線と笑みをまだ幼さの残る顔に浮かべる。

「あなたがこのまま無様な姿晒しておめおめと逃げ帰り、二度と姫には近付かないと誓うなら何もしない。この忠告を無視するのなら、容赦はしない」

少女の忠告。しかし、そんな言葉など男が受け入れるはずもなく。

「俺は神を操る神操者のガトウだ!! 少し力が使えるからといって、いきがるな小娘!!」ガトウと名乗った男は激しく激昂する。そのガトウに呼応するように、残り二体の異形が動き出す。

異形の腕は一直線に少女を狙う、速度はかなり早い。少女に交わすべなど無いように思われたが。

「キスミ」と少女が呟く。すると、少女の目の前の空間に青白い薄透明の盾のようなものが突如現れた。

異形の腕が、その盾に吸い込まれるように動き、青白い火花を散らして弾かれる。

「アオイ」と次に少女が呟く。少女の手にしていた短刀が再び宙に浮く、短刀は意志があるかのように、異形に斬りかかった。

なすすべもなく切り裂かれた異形は、先ほどの礫にされた異形と同じように宙に霧散していった。

「な、何だと!？」

手駒を失ったガトウ。その様子は激しく狼狽している。

「こんな屑神、いくら使役しようと私には、指一本触れられやしな
い」

「俺は神繰者の……!!」

少女が右手をガトウに向けかざす。するとガトウの動きが止まった。ガトウは必死にもがくが、ぴくりとも動かない。

「安心しな死にはしないよ、ただ異空間で余生を過ごしてもらっけ
どね」

ガトウは己の目を疑った。かろうじて動かすことのできる、目で自分の体を見る。そこには立体だった体は無く、平面となり宙に浮いていた。

少女がかざした腕の指を動かしていく、その指と連動しているのか、平面となったガトウの体が折り畳まれてゆく。

音はなく静かにおられてゆくが、ガコンガコンと几帳面に折られる。

数秒もしないうちに、ガトウの体はそこには無く、彼の平面となった頭部だけがそこに存在していた。
頭部だけとなったガトウに少女が近づいてゆく。

「何か言つとくことあるかしら？」

「……………何なんだ貴様……………！？」

ガトウの言葉を受け、少女は静かに目を閉じる。ゆっくり視界を開け、唇を動かした。重くゆっくりと。

「私は現人神、私は神と常にともにある」

「覚えたぞ現人神……………必ず……………」

ガトウが捨てて台詞を残し、残されていた頭部も最後まで折り畳まれ、その場から消滅した。

消滅したことを確認すると、横になっている姫へと振り返る。

その体は泥だらけとなっており、高級感あふれる着物も台無しになっている。

意識が朦朧としている彼女を少女がひよいと持ち上げる。

「さあ帰りましょかね」

薄れゆく意識の中、姫が見たのは、女神のように優しい笑顔をした少女の顔だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4135z/>

やおろずの神々のおわす国

2011年12月14日05時56分発行